

未来のケアを考える



出席者

東京大学大学院医学系研究科
健康科学・看護学専攻

仲上豪二郎 教授 (写真右)

公益社団法人川崎市看護協会
堀田彰恵 会長 (写真中央)

東京科学大学総合研究院
化学生命科学研究所
西山伸宏 教授 (写真左)

少子高齢化で「ケアを提供する人」の不足が深刻になる中、人材確保やツール開発によるケアの供給維持に加え、「ケアを必要とする人」を減らすという逆方向からの発想も求められている。12月4日に開催される「CHANGEシンポジウム」を前に「ケアの需要と供給」の両面から課題解決に挑むCOI-NEXT川崎拠点（プロジェクトCHANGE）の研究者らに、その現在地と未来を聞いた。

「ケアの需要と供給の現状は。」

堀田 川崎市の高齢化率は約21%と全国平均（29%）より低いが、高齢者ニーズが少ない訳ではない。一方、人口10万人あたりの看護師数は全国最低レベル。看護師免許を持ちながら離職している「潜在看護師」が安心して復職できる環境づくりに力を入れている。

仲上 全国的に看護師が不足する一方、少子化の中で若い看護師を大幅に増やすことは現実的ではない。潜在看護師の復職を促すとともに、科学技術で「ケアの供給」を支えることが必要だ。

西山 もう一つ重要なのが、「ケアの需要」を減らすこと。私たちが取り組む「老化制御」は若返りを目指すものではない。フレイルや加齢性疾患を予防・治療し、ケアが必要な人を減らすことが目的だ。老化細胞の検出・除去に加え、変形性関節症や加齢黄斑変性など、QOL（生活の質）を損なう疾患に対するmRNA医薬の開発にも挑戦し、健康寿命の延伸を目指している。

「看護と工学の技術を融合した「看護工学」はどう貢献できるか。」

仲上 看護の本質は、療養者に寄り添い、専門的な視点で状態を観察し、必要なケアにつなげること。しかし今は、看護師がベッドサイドを離れ、PCへの入力など間接業務に費やす時間が増えている。「看護工学」は看護師を単に楽にする技術ではなく、限られた勤務時間の中で、療養者に向き合う時間を取り戻すための工学と考えている。

堀田 看護師の業務は法律で「診療の補助」と「療養上の世話」に定められている。後者は、単なる身の回りのお世話ではなく、医学的知識と看護の視点をもって療養者の心身の状態を観察し、何を必要としているかを予測して最適な療養環境をつくる専門的な行為である。科学技術は、療養者だけでなく、看護師自身のQOLも高めると思う。

西山 自身、骨折で入院した際、動かせ

看護工学が拓く安心社会

ない脚を看護師が可動範囲内で優しく動かしてくれて、それがリハビリにもなったことが強く印象に残っている。技術的には機械でもできるが、任せるとなると怖さを感じる。看護ケア製品には「安全」だけでなく、人が「安心」できる設計が必要だ。

仲上 まさにそこが重要だ。科学技術が進歩しても、安全な技術がそのまま安心につながるとは限らない。だからこそ、人間の看護師の役割は決して無くならない。技術と人がそれぞれの強みを生かすことが、これからの看護工学だと考えている。

◆ ◆ ◆

NHK連続テレビ小説「風、薫る」では、抗生物質もない明治初期、伝染病が猛威を振るう中で、衛生管理と献身的な看護に力を尽くした「明治のナイチンゲール」大関和の人生がモチーフの一つとして描かれている。時代は変わっても、ケアが人々の暮らしに「安心」をもたらすことに変わりはなく、少子高齢化が進むこれから、そのケアを人の力だけで支え続けることは難しくなる。では、AIをはじめとする科学技術は、看護をどう支え、人にしかできないケアをどう豊かにできるのか。次回特集は「AI時代のケアイノベーション」をテーマにした対談で、その可能性を探る。

～参加申し込みはこちら～

NHK連続テレビ小説「風、薫る」の原案本「明治のナイチンゲール 大関和物語」の著者・田中ひかる氏を特別講師に迎え、第5回CHANGEシンポジウム『「明治のナイチンゲール」に学ぶ未来のケアイノベーション～看護の原点と先端科学の融合～」を12月4日に開催する。明治の看護の原点を振り返るとともに、視点を近未来へ移し、「AI時代のケアイノベーション」をテーマとしたパネル討論も行う。詳細・参加申し込みはQRコードから。



https://iconm.kawasaki-net.ne.jp/event_5th_symposium.html